

# インドネシア騒乱 帰国家族から見えた現代ニッポン人

福永 佳津子

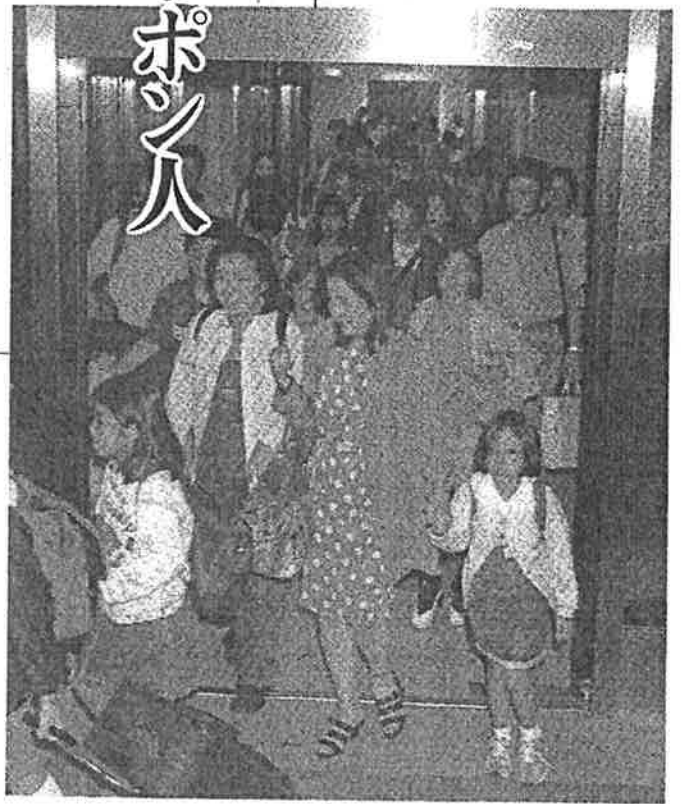
スハルト大統領を辞任に追い込んだ、今年五月のインドネシア騒乱。任期途中で緊急帰国した現地駐在員の妻たちの半数は、再びインドネシアの生活を選んだ。海外の政情不安に彼女たちはどう対応したのか。彼女たちの見たインドネシアとは、日本とは何だったのだろうか。

「『無事でよかった』と高揚していた気分は、時間がたつと『インドネシア恋し』に変わった」。今年五月に勃発したインドネシア騒乱に巻き込まれる危険を避けるため、故国ニッポンに緊急帰国した、日本企業の現地駐在員の妻の言葉だ。

「日本ではできないことを思い切り楽しむ」と心に決め、テニスや習いごとに明け暮れた。『主婦天国』で暮らしていた彼女たちだが、スハルト大統領退陣に伴う政情悪化で帰国を余儀なくされ、出国のために日の丸の旗の下に集まった時には、日本国に守られる日本人であることをあらためて強く意識した。しかし、究極の緊張状態を逃れ、日本に立ち戻ったものの、子供

の生活や教育環境には戸惑いがあった。事態の沈静化を見るや、急いでインドネシアに戻っていった母親たち。その目から見た、インドネシア騒乱と久しぶりの日本の印象を紹介する。

は、「覚醒の日」が迫る、五月一日深夜から一八日未明に集中した。緊張状況を実感するまでには少し時間があつた。ある商社マンの妻は「トリサクテイ大の学生射殺事件の翌二三日、日本人クラブでブリッジを楽しんだ帰り道、学外にあふれ出たアトマジヤヤの学生デモで通れなかったのが被害と言えば被害だった。しかし学生たちはアピール文の書かれた垂れ幕を持っていただけ



5月18日 臨時第1便から降り立った日本人

で、無秩序ではなかった」と、話す。

一四日、家路に向かったスクールバスが暴徒に阻まれてUターンし、学校に引き返すという出来事が発生、邦人社会の緊張度は急激に高まった。「学校に置いておく方が安全」の第一報から、「お米三〇〇キ」と非常食を確保」「今夜は学校に泊める」までの経過報告は、逐一学校からの連絡網で回った。結局子供たちは一泊し、「祈りの時間に暴動は起きない」との読みから、イスラム教徒の朝一番の祈りの時間帯に合わせ、翌早朝の四時半過ぎに学校を出発、無事帰宅した。

一方、インターナショナルスクールに通学している子供に聞くと、その時点で既に、級友たちは国外退去していたという。「中でもアメリカ人の行動の早かったことといったら。大使館の避難命令（ハリム空港に自力で集合。来られない家族宅には空軍のヘリをピックアップに向かわせる）からわずか三時間で脱出を図り、一五日には誰もいなかった」（現地赴任者の妻）。それに引き換え、具体策が見えてこない邦人社会に焦りが見え始めたが、日本企業は大国

のドラマティックな大脱走を、ただ指をくわえて見ていたわけではなかった。

### 出国「ゴースイン」は本人任せ

「年初めからきな臭さを感じ、家族を含めた社員全員分のオープンチケットを用意していた」「社員全員に携帯電話を、夫人にボケベルを持たせた」「出国に備え社員と家族分の出国税（二〇〇万円）とプラスアルファを社員に貸し付けていた」「いつでも飛ばせるチャーター便を交渉、確保していた」——など、準備万端を整えていた企業は多かった。とはいえ、「ローカルスタッフを気遣えば、露骨に逃げの姿勢を見せられなかった」という事情もあった上、事態の深刻度を測りかね、何をもって脱出への決定打とするかで迷っていた。

そのため、最終段階の各民間企業の対応は微妙にずれた。短期戦と読んで近隣諸国に土壇場で出国させた企業、臨時便を待たず定期便を満席にして家族帰国を強行した企業、そして社員もろともチャーター機で一

足先に帰国したアメリカ顔負けの企業もあった。しかし、ほとんどの企業は一七日午前二時に外務省が出した「危険度四」を合図に、同夜から翌一八日未明の臨時便に出国を集中させた。「あの号砲（危険度四）がなければ出られなかった。会社は『各自の判断で』と言うだけ。迷い決めかねる状況に『帰れ』との国のゴースイン。ありがたかった」というのが、大方の本音だ。中には「あの号砲で脱出費用が本社持ちになり、ホツとした」と打ち明ける現地法人トップもいた。もちろん、「あのタイミングでの帰国令では時期遅し」と、日本政府を批判する声も上がった。ODA最大国のインドネシア政府を事態収拾力なき国と決めつけて出ていくことに抵抗があったのではないか、というのだ。

結局、今回の外務省の対応を、ほとんどの企業の海外人事担当者は「今回に限って言えばよくやったんじゃないですか」と見ている。ある担当者などは「邦人の集合場所となつたヒルトンホテルで、外務省職員が旗を持ち、誘導している様子を見て隔世の感があった」と、感動すら

覚えたという。

ところで、こうした企業や国の「勧告」を素直に受け入れられなかった家族もいた。妻たちの訴えはこうだ。「インドネシアに十余年。この程度の暴動には慣れっことで、今回も帰国には及ばないと肌で感じたのに『所長の妻のわがままは通らない』と夫に叱られ、渋々帰国した」「日本人居住区と暴動エリアは別。じっとしていたら終わつたはず。出国しようとしたために、遭わなくてよい怖い目に遭つた」……中には「使用人に任せて家を空けて出てくる方がずっと危ない」と言う人もいた。

さらに、はなから帰国便に乗る気持ちになつた妻たちもいた。日本人学校のホームペーパー緊急版（六月一日付）によると、在籍生徒の行動の内訳は、日本への帰国九三〇人、近隣諸国へ避難一七人、そしてインドネシア在留者が六六人。在留者の大方が、インドネシア人の母を持つ児童だろう。

政府臨時便はそれぞれの思惑を丸ごと飲み込み、とにもかくにも邦人搬送の大役を果たした。空港への道

は日本人が大挙して動いたところには  
平静さを取り戻していた。

しかし、日本人であることの危険  
を意識した人は多かった。ジャカル  
タ市民たちは暴徒からの攻撃の標的  
になるまいと「Milk Pribumi (こ  
の家はインドネシア人の所有物。自分  
たちはチャイニーズ系インドネシア人  
ではない)」と書いた張り紙を、家の  
目立つ位置に張った上、射殺された  
学生を悼み、学生たちの行動を支持  
する強い意思を表す半旗を掲げてい  
たからだ。邦人の中にも、とっさに  
「自分たちも逃げる時に華僑と間違  
われて襲われかねないとの危惧か  
ら、急仕立てで手書きの日本国旗を  
作り、車の窓に張りつけた」という  
人や、社員全員に「日の丸」を配布  
した企業があった。

### 情報は自分で集めた

到着した空港が最終関門だった。  
インドネシアには、一人当たり一〇  
〇万円の出国税の支払いがある。こ  
の騒ぎに乗じて、イミグレーション  
担当者が難癖をつけ、数倍から五倍  
近い出国税を巻き上げたとか。つり

上げ分も含めてルピアを用立てした  
企業社員は悠々だが、「列の前の人  
が紙袋いっぱいのお金を渡してい  
るのを見た。さんざん待たされた上  
のこの仕打ち。かと言って関所破り  
をするわけにもいかず、言われるが  
ままに払う人ばかりだった」と言う。

緊迫情勢の中、正確な事態掌握の  
手段は何だったのか。成田空港で  
「情報をどこで得たか」を帰国者に  
聞いたところ、「現地放送は当てに  
ならない。NHKが唯一の情報源だ  
った」(JICA職員)など、九八%  
の邦人が「ライフラインはNHKだ  
った」と答えた。また、インターネ  
ットは、マスメディアでは伝わらな  
い、生活密着型情報をリアルタイム  
で掲示し、注目された。

六月二日夜、外務省が危険度を  
「二」に引き下げ、早速日本人学校  
の緊急版ホームページが「一〇日学  
校再開」を告げた。六月二三日時点  
で、小・中学校合わせて八九八人の  
うち、四一七人が復学したが、残る  
約半数の中には、母の実家に身を寄  
せるなどし、そのまま日本の地元校  
に転校、区切りの良い一学期末まで  
日本に残留する子供もいれば、これ

を機に日本人学校を退学し、永久帰  
国を決めた子供もいる。

緊張が柔らぎ、少し落ち着いてみ  
ると、母国・日本ではあってもしょ  
せんは仮住まい。母親たちは生活の  
基盤をすべてインドネシアに置いて  
きた不都合を感じ始めた。また、何  
ともどこかで緊張感の薄い日本に当  
惑もし、子育ての環境への苦言も彼  
女たちから聞こえてきた。

帰国直後、彼女たちは日本の低俗  
なテレビ番組やポルノ化した少年少  
女雑誌に戦々恐々とした。インドネ  
シアでは、日常で裸に接する機会な  
ど皆無だったからだ。また、別の子  
供の母親は「子供は毎日の移動をス  
クールバスや親の車に頼る管理生活  
から一転、自分の足で自由に行動し  
始めた。この、放し飼いの状態」にど  
う対応したらいいのか」と、嘆い  
た。小学校低学年の子供を持つ母親  
は「息子が初めて見るアニメや漫画  
にのめり込んでテレビの前から離れ  
ない」と、こぼした。

日本に帰りさえすれば安全との神  
話も、かなり疑わしかった。「イン  
ドネシアでの犯罪は食べるに困って  
のもの。しかし日本に起きる犯罪に

は、つかみどころのない正体不明の  
恐怖が感じられかえって怖い」との  
声も。また、「帰国早々テレビが松  
田聖子報道一色で、リポーターが走  
り回っている様を見せつけられ、げ  
んなり。日本人の平和ボケにはショ  
ックさえ受けた」と、相変わらずの  
芸能騒動に落胆した母親もいた。

やがて、後にしてきた国への思い  
が口を突くようになった。「インド  
ネシアの人たちって子供好きで、よ  
くあやしてくれる。日本が遠い昔に  
置き忘れた人の心が残るインドネシ  
アが恋しい」「メイドや運転手に留  
守宅を残してきた飼犬の世話を任  
せたまま。先に戻った夫に早く元気  
な顔を見せたい」。純粹培養された  
子供たちが集まっていた、日本人学  
校の教育水準の高さをなつかしがる  
母親すら出てきた。

内乱の危機は取りあえず回避され  
たとはいえ、不安材料が拭い去られ  
たわけではない。しかし、彼女たち  
にとってインドネシアは「逃げる  
国」ではなく「戻る国」だったのか  
もしれない。

(ふくなが かつこ)

海外生活カウンセラー